

2023年度東京藝術大学音楽学部

入学試験問題

出題意図等

作曲科（自由作曲）

- ・「出題意図等」とは、出題意図あるいは標準的な解答例のことです。
- ・「出題意図等」についての問い合わせには対応いたしません。

第3回「自由作曲」の出題意図

第3回「自由作曲」では、与えられた楽曲の断片（9小節）から、ロンド・ソナタ形式で、弦楽四重奏曲の終楽章を完成させる問題を出題した。楽曲の冒頭には、短い序奏が置かれ、第1主題の提示の後、第1主題の確保の途中までが楽譜に記されている。以下が出題意図と留意すべき点である。

序奏（弦楽四重奏）：1小節目から2小節目まで

2小節の短い序奏が置かれる。オクターヴ・ユニゾンにより、*f*で提示される基本動機は、短3度上行の後、刺繍音を伴う短2度下行および上行の16分音符の動きで始まる。完全4度上行を挟んで、付点8分音符と16分音符で2度下行する音型が加わり、最初にナポリの6の和音で、次にVの6の和音で、基本動機が2回繰り返される。

2小節目に入ると、8分音符で動く楽想になる。基本動機の4つの拍頭に置かれた音のみ抽出すると、2つの6度上行（ラ→ファ♯、レ♯→シ）が確認できる。そこから、基本動機が8分音符で6度上行（ソ♯→ミ）、減7度上行（ラ♯→ソ）、減7度下行（ド→レ♯）と、要約されている点、加えて、チェロの半音階下行に伴い、半拍ごとに和音が変化している点に注目したい。最後に全奏者が、重音奏法でドッペルドミナントとドミナントの2つの和音を奏した後、次の小節のIの基本形の和音で全終止となる。

最初の2小節は、第1主題の前置きの序奏に過ぎず、3小節目から第1主題（ロンド主題）が始まる楽曲構造を、正確に把握できているかが重要である。

第1主題の提示（第1ヴァイオリン）：3小節目から7小節目まで

第1主題は *mp* で第1ヴァイオリンにより提示され、基本動機に含まれる短2度と3度の音程が用いられる。第1ヴァイオリンの第1主題に対して、第2ヴァイオリンは、8分音符が主体、ヴィオラは、4分休符と4分音符の組み合わせ、チェロは、付点4分音符と8分音符による長短格のリズムとなっている。これら3つの対旋律を第1主題と組み合わせ、展開部で活用できるか、対位的な感覚が試される。

6小節目から平行調に転調する。7小節目でト長調の属七の和音に達すると、2つのヴァイオリンが序奏の基本動機を *f* で高らかに奏でる。次に、減七の和音で主調に戻り、基本動機の反行形を含む下行形のパッセージに変化する。この3度の音程を多く含む16分音符の特徴的なパッセージを、提示部または展開部で活用できているかも重要な点である。

第1主題の確保（ヴィオラ）：7小節目の最後から

第1主題の確保では、上記の2つのヴァイオリンによるパッセージの下で、第1主題が *mf* でヴィオラによって奏される。「減七の和音」、「増六の和音」、「減五短七の和音」、「属九の準固有和音」などの和声進行から、適切に第1主題の確保を補完しているか、続く推移で用いる素材は何か、和声の優れた感覚と作曲の応用力が問われる。

提示部について

提示部は、「序奏」、「第1主題の提示」、「第1主題の確保」、「推移」、「第2主題の提示」、「第2主題の確保」、「推移」、「コデッタ」、「第1主題の再現」によって構成されることを意図した。提示部の最後では、ロンド・ソナタ形式に従って、3小節目からの楽想を用いて、「第1主題の再現」が置かれているかが試される。

展開部について

展開部は、いくつかの群によって構成され、さまざまな転調を伴いながら、第1主題と第2主題、または序奏の楽想の展開を意図している。また、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第8番ハ短調《悲愴》作品13から最終楽章の展開部を例に挙げるまでもないが、展開部に新しい主題を置くことも想定できる。提示部で用いられた一連の素材をいかに展開させているか、2つの異なる素材の対位法的な組み合わせ、提示部で使用しなかった近親調や遠隔調への転調など、楽曲の中間部でもある展開部では、作曲家にとって必要不可欠な対位法や和声法の総合的な力が問われる。

再現部について

再現部では、提示部とは異なり序奏を伴わない。この弦楽四重奏曲では、「ロンド・ソナタ形式」が指定されているため、「第1主題（ロンド主題）」から再現部を始めているかが問われる。また、楽曲全体がシンメトリックな構造となるよう、基本動機から始まる2小節の「序奏の楽想」を用いて、4小節から8小節程度のコーダが置かれることを意図している。